

(様式 3)

水源環境保全・再生かながわ県民会議 第 1 回事業モニター報告書

事業名 水源の森林づくり事業の推進
丹沢大山の保全・再生対策

報告責任者 高橋 克矢

実施年月日 平成 25 年 8 月 26 日

実施場所 秦野市寺山、清川村煤ヶ谷

評価メンバー 足立 功、井伊 秀博、五十嵐 淳一、井上 貞子、久保 重明、
倉橋 満知子、坂井 マスミ、高橋 克矢、増田 清美

説明者 自然環境保全センター職員

事業の概要

・ねらい

森林整備とシカ管理捕獲を一体的に進め、中高標高域での生息環境整備の土台となる状態を作り出すことを目的とする。

・内容

管理捕獲を実施してきた箇所周辺で生息密度が上昇し、森林整備効果が十分に発揮されない状況となっていることから、水源の森林づくり事業などの森林整備地及びその周辺地域で「生息環境整備の基盤づくり」を目的とした管理捕獲を行う。また、森林施業とシカ捕獲の連携を試行し、モニタリングによって効果を検証する。

・実績（平成 24 年度）

① 組猟委託による管理捕獲を実施 307 頭のシカを捕獲（うちメスジカ 164 頭）
うち水源林が所在している地域での捕獲数 215 頭

② ワイルドライフレンジャー（WLR）と組猟委託あわせて 381 頭のシカを捕獲
うち水源林が所在する地域での捕獲数 253 頭

③ 人工林の群状伐採や植生保護柵設置等の森林施業と誘引捕獲を組み合わせる等の試行的取組

平成 25 年度「中高標高域ニホンジカ管理捕獲等事業」 予算 121,720 千円

評価結果	評価点
共通項目	
① ねらいは明確か 森林整備とシカの管理捕獲の一体的取組のねらいは明確であり、猟友会による組猟では実施が困難な山稜部でのシカ捕獲に専門的技術をもつワイルドライフレンジャー（以下 WLR）が担い、猟友会と連携しながら捕獲管理業務を遂行しているのは適切と言える。	5点：5名 4点：3名 3点：1名
② 実施方法は適切か WLR3名で広範囲な活動を行っていることに効率性・労力消費の面で改善の余地がある。一方で、猟の手法を工夫して実践している点やシカの頭数調査・分析を行っている点は評価できる。	5点：1名 4点：4名 3点：3名 2点：1名
③ 効果は上がったか 管理捕獲によりシカの生息密度の低下や植生の回復などの一定の成果が出ている。（昨年度 74 頭管理捕獲） WLR3名では効果が限定的であり、今後 10 年を見据えた取り組みが必要。	5点：1名 4点：2名 3点：5名 2点：1名
④ 税金は有効に使われたか シカの管理捕獲で保水力のある水源林を保つための基礎は構築できつつあるが、モニタリングなど継続的に行い税金の有効性を検討していかねばならない。短期間では税金の投入効果の判断が難しい。	5点：1名 4点：2名 3点：6名
個別項目	
① シカ捕獲 WLR は現在 3 名で活動。単年度契約で雇用が不安定で事業継続性に非常に問題があると多くの委員が厳しく指摘。未来志向型の取り組みではあるが、猟友会への支援体制の整備、最終目標頭数を決め早い段階で適正頭数にすることが必要。今後も継続的に対策をとり続けていき、税金にだけ頼ることなく後継者育成のための方策を示すべき。	4点：1名 3点：4名 2点：3名 1点：1名
総合評価	
<ul style="list-style-type: none"> ・森林整備と管理捕獲の一体的取組は評価できる。 ・保管小屋の設置やモノレールの整備等 WLR 事業を強化すべき。 ・WLR3名では効率・効果に改善の余地がある。 ・森林塾とより強固な連携が必要である。 ・今後、モニタリングデータの解析や事業成果を継続的に注視していく必要性がある。 ・狩猟師減少から WLR は必要だと考えられるが、WLR を安易に税金で賄う方法をとりたいくない。検討が必要。 	4点：4名 3点：5名

1 共通項目
ねらいは明確か

委員	評価・疑問提起・改善示唆	評価点
足立	【秦野市寺山】 森林整備の効果を十分なものにするため、阻害要因となるシカを管理捕獲して適正な生息密度を保とうとする、ねらいは明確である。	4
井伊	【丹沢・札掛】 WLRの創設とその実際の活動は、水源の森林づくり事業及び丹沢大山の保全再生対策の方針に合致しているし、これまでの結果もそれを裏付けているので 高く評価したいと思います。	5
五十嵐	【布川流域地獄沢周辺】 下層植生を繁茂させる為の間伐等の施行に平行し高標高域における管理捕獲に専門的に従事するWLRの配置を水源環境保全・再生施策に取り入れられた事は、高く評価できる。	5
井上	【秦野市寺山】 シカの生息密度が高く、水源環境保全に深刻な影響が考えられるので、シカの捕獲と森林整備を一体的に実施する取組のモニタリングでした。具体的に現地でシカ捕獲実演と説明を受け、プロジェクターで5年間のデータ解析を見て、そのねらいははっきりとわかり明確です。	3
久保	【布川流域地獄沢周辺】 シカの高密度状況が継続している急峻でアクセスの困難な山稜部付近にWLRを配し、その活動と組猟が一体で状況を解消し、森林整備と中標高域の生息環境の整備を進めようとするねらいは明確である。	5
倉橋	【秦野市寺山】 明確である。	4
坂井	【秦野市寺山 布川地獄沢周辺】 鹿の数を減らす必要が生じている地域に直接緊急介入したことはやはり有意義。実績も上がり、効果も見えてきている。ねらいは明確であった。	5
高橋	【布川流域地獄沢周辺及び札掛森の家】 明確である。	5
増田	【秦野市寺山、清川村煤ヶ谷】 神奈川県猟友会が実施していない地域(山稜部)をワイルドライフレンジャーが担い、また、猟友会と連携しながら管理捕獲業務を遂行するのは明確。	4

実施方法は適切か

委員	評価・疑問提起・改善示唆	評価点
足立	猟友会による組猟では実施が困難な山稜部でのシカ捕獲を、専門的技術をもつワイルドライフレンジャーの投入で行おうとする方法は、適切である。	4
井伊	WLRの設置と活動の方向性は適切だと思いますが、対象エリアの広さとWLRの数のアンバランスは否めません。現状では目標・WLR双方にとって中途半端な感があります。保管小屋の設置や増員の方向で改善を望みます。	3 (要改善の意味の点数)
五十嵐	WLRは国内初の取組みということで、試行錯誤の渦中にあると思うが、調査と分析を堅実に実施していることから適切な方向に向かっていると実感した。	4
井上	シカの捕獲の知識はありませんでしたが、24年度にワイルドライフレンジャーの山稜地域捕獲が加わって、一層実施方法はワイドとなり適切である。	3
久保	猟の手法はいろいろ工夫しており、猟の実施方法は適切だと思う。しかし山稜部付近もかなり広くWLR3名では少なすぎるし、また現場への上下で時間的ロスと労力消耗が大きく、モノレールの設置が望まれる。	2
倉橋	適切と見ます。	4
坂井	とにかくまずやってみることに意義があり、やってみて、次を考えればよい。このほど環境省から出た北海道を除く生息数予測では、捕獲数を維持しても猟師は減少し、現在の261万頭が平成37年には500万頭になる。猟師は減り、鹿は山梨県からもやってくる。対策に絶対はない。	5

平成25年度第1回事業モニター評価一覧

参考資料

委員	評価・疑問提起・改善示唆	評価点
高橋	個体数調整、生息環境整備、被害環境整備、モニタリング等に対する適切な方法が実施されているように感じられる。	4
増田	銃器を使用する忍び猟は少人数でも効果が見込める反面、高度な技術を要する等の課題もある。林道車上狙撃(シャープシューティング)は警備員を配置して林道閉鎖するなど、人員確保や経費面で負担も多いのではないかと。	3

効果は上がったか

委員	評価・疑問提起・改善示唆	評価点
足立	管理捕獲により、シカの生息密度の低下や植生の回復などの一定の成果が出ており、効果は上がっている。	4
井伊	WLR活動の効果は上がっていると思いますが3人では効果は当然限定的となっているので 今後の10年間でこのままでは期待する効果は得られないのではないかと思います。	3 (要改善の意味の点数)
五十嵐	施行を続けることにおいて効果の期待度は大きいですが、現状、3人のWLRで到達困難な高標高域での効果の確認をするのは現段階では難しい。	2
井上	現地での説明とプロジェクターによるシカ頭数減、植生回復、森林保護などのデータの解析説明で効果は上がっている。地道にデータとモニタリングの検証を長いスパンで続けて、効果はより上がっていくと思いました。	3
久保	WLRの3名の活動についてみれば昨年度74頭管理捕獲は効果あったと思う。しかし全体から見るとまだまだ人員と機動力の不足で効果が期待できない。	3
倉橋	全体としてはあがっているように思うがよく解らない。	3
坂井	県が現場に直接関与することで、より具体的な実態の把握が進んできたことは、今後の方針を考える上で意味のある一歩である。また急勾配の一般の人が入りにくい場所の実態の把握が進んだことも、よい効果である。	5
高橋	柵外の変化を表した写真の前後を同じ場所のものを掲載し、効果の是非を示したほうが良い。付近の場所の掲示では確かな効果があったか判断出来かねる。	3
増田	昨年度の捕獲数に対して、今年度(8月まで)はすでにその数を超過している点では効果が上がっていると言えるのではないかと。	4

税金は有効に使われたか

委員	評価・疑問提起・改善示唆	評価点
足立	シカの管理捕獲は保水力のある水源林を保つために不可欠であり、効果もそれなりに上がっているため、税金は有効に使われていると考える	4
井伊	シカと森林の一体的管理の具体的施策として 有効に使われていると思います。植生を保全するための施業方法の一つ考えて、もう少し増額しても良いのではないのでしょうか。	4
五十嵐	森林整備とシカ捕獲の一体管理を進める基礎は出来つつあるが、税金の有効性についてはモニタリングを継続し効果を検証していかなければわからない。	3
井上	ワイルドライフレンジャーによるシカの捕獲が、効果が出ているが、水源税全体の経費対効果の面で、最初は報酬の高いのにびっくり。しかし、捕獲の効果がはっきり表れているので、税金は有効に使われていると思います。	3
久保	WLRの活動に税金を投じることは有効だと思う。しかし税金を投じる効果を考えると、時間も大きなファクターだと考える。ある程度短い時間に税金を投じ、ある段階まで早く達することが肝心だと考えている。	5
倉橋	現時点では妥当と思われる。	3
坂井	行政が行う以上、数が増えたことの対症療法として撃つのではなく、ここで撃つ経験を積み、将来の山のあらゆる状況の変化の中でもそれに対応できる人材を残すことこそ、税金を投入する価値があるのではないかと。定年退職後も民間で猟を続けてくれることを前提とした採用を。	3

委員	評価・疑問提起・改善示唆	評価点
高橋	おおむね有効活用であるように感じる。	3
増田	1年間の実績だけでは、費用対効果としての判断が難しい。	3

2 個別項目

委員	評価・疑問提起・改善示唆	評価点
足立	<p>【シカ捕獲】</p> <p>猟友会による組猟は高齢化により実施が困難になりつつあり、ワイルドライフレンジャーは現在3名しかおらず身分も不安定で継続性が危ぶまれる。</p> <p>管理捕獲が将来にわたって持続して継続していけるように、猟友会への支援体制の整備やワイルドライフレンジャーの増員および身分の安定化が望まれる。</p>	2
井伊	<p>【シカの捕獲目標と能力を考えた施策を】</p> <p>活動エリアを猟友会と済み分けている状況ですが、今後の猟友会の高齢化による捕獲能力の低下を考えると現状のままでは施策の行きづまりが想定されます。おおよその生息頭数と最終目標頭数が定まれば、極力短期間で捕獲しきることが山にとっても捕獲能力的にも必要ではないでしょうか。早い段階で適正頭数にすることが出来れば、あとは少人数でそれを維持することも可能でしょう。さらに踏込んだ思いきった施策を望みます。</p>	3 (要改善の意味の点数)
五十嵐	<p>専門的な知識・能力・貴重な経験を有するWLRの方々の単年度契約については非常に粗末な扱いだと思う。</p> <p>命の水を守る最前線で活躍されている方々に対し敬意をもって雇用形態の見直しを実施してもらいたい。</p>	1
井上	<p>【シカの捕獲】</p> <p>現地でシカ捕獲について実演されたり、野生生物課長による説明は、そつがなく良かった。加えて、シカ捕獲の外部専門家の実務サポート体制のこと、モノレール設置数のこと、ワイルドライフレンジャーに関する事などの取組についての考えも伺えたらもっと良かったと思いました。</p>	3
久保	<p>【シカ生息環境整備】</p> <p>シカの生息環境と森林整備を一体で考えようとしているのが本県の考え方だと思っている。シカの問題は知床、日光、大台・大峰、剣山・三峰・・・全国にわたっており、本県は考え方も手法も他県に先んじているものと認識しており、今後はより効果が短時間で上がるように税金を投じて行くことを期待したい。</p>	4
倉橋	<p>【シカ対策】</p> <p>動植物の生態系のバランスを崩した結果での最も重大な課題と思います。非常に手間が掛かり、効果も薄い対策と感じています。相手が動物で、自由に移動できる訳ですから、現時点では頭数が減ることがあっても、こちら側の体制によって、将来的には増減の波があるのではと思います。継続的な対策として続けていくしかないと思わざるを得ない。</p>	3
坂井	<p>【雇用は本当にこれからの時代に合ったやり方か】</p> <p>県が、現場の調査や一般の人に依頼するのに厳しい場所を担当する目的で採用することは理屈にかなうが、量の確保に税金を投ずる(雇用すること)には、戦略もビジョンもない。問題解決を金銭に頼るやり方で将来の担い手が増えることはなく、あくまで過渡の対応でしかない。</p> <p>【鹿の問題発信と同時に、担い手獲得の視点が必要】</p> <p>折角クレー射撃練習場の改修ができたのであるから、ぜひそれも機会と捉えてこの問題の発信に活用して欲しい。狩猟後継者育成のための方策を示すべきである。始まったばかりであるので、今後に期待する。</p>	2

高橋	<p>【ワイルドライフレンジャーについて】 単年度契約・人材派遣を頼る雇用不安・捕獲等の技術の蓄積が難しい問題・人材育成の問題・3名による負担大・猟銃等の経費の個人負担割合が高い問題・猟友会の高齢化問題による人材獲得困難等多くの問題が内在している。 今後これらの対策がなければ、鹿の頭数調整などの業務に大きな障害となりうる要素を抱えていると感じる。 一方で、全国的にも先進的な取り組みであり実績を積み、体制整備がなされるように様々な角度からPRや検討していく事が求められると感じる。</p>	3
----	---	---

委員	評価・疑問提起・改善示唆	評価点
増田	<p>【ワイルドライフレンジャーの雇用形態】 ワイルドライフレンジャーは県と派遣会社の単年度契約ということだが、危険リスクの高い仕事の割には、雇用の不安定さがあり、その仕事に見合う雇用形態ではないように思う。レンジャーの生活の安定確保も必要ではないか。そのほうがレンジャーも定着するのではないか。県の直接雇用が難しい場合も含めて、雇用問題は課題といえる。</p>	2

3 総合評価

委員	内容	評価点
足立	<p>水源林保全のためには、そこで暮らす野生動物も適正数を保っていなければならない。その点で森林整備と管理捕獲を一体的に進め、シカの生息域と生息数をコントロールしようとして一定の効果を上げている事業の在り方は、十分に評価できる。</p>	4
井伊	<p>WLRの創設とその活動は、水源の森林づくり事業及び丹沢大山の保全再生対策の具体的施策として有効だと思いますが、人数の問題で効果が限定されるのは問題だと思います。水源林の保全再生の目的に資する施策なので さらにWLR事業に強化・注力すべきだと思います。 具体的提案として (ハード面) ①保管小屋の設置・・・維持管理が難しいなら 既存の山小屋と連携するのはどうか ②モノレールなど・・・既設設備の積極利用回数を利用してのヘリの利用 (ソフト面) ①雇用の改善・・・まずは 短期集中で人数を投入し効果を出すことが有効だと思います。頭数が一定の水準に達すればその後の維持について、例えば、今の水源林施業事業の一つとして、森林組合や事業体に所属するとかシカ管理を請負う会社の立ち上げを推進・助成する。 ②林業塾とのタイアップ・・・水源林施業の一環としてのシカ管理なので、一施業技術として森林塾のカリキュラムに組み込みWLRへの関心を高め、育てる仕組みを用意する。</p>	3 (WLRをさらに積極推進すべしの意味の点数)
五十嵐	<p>人間のエゴによる社会生活で犠牲となり平野部から山頂まで追い詰められ、更にその命を狙われ続けなければならないとても悲しい野生生物の捕獲である。 しかし森林整備とシカ捕獲の一体管理という複合的な取り組みは、とても密接に関係しており水源環境を守っていく上で重要であることも理解できた。また人間が自然に介入してしまった以上この取り組みは継続していく他はなく中標高域での生息環境の整備に邁進し江戸時代から続く人間とシカの問題に終止符を打つべく施行してもらいたい。 評価としては、施行が始まったばかりなので良いとも悪いとも判断できず今後の効果を注視するという意味で「3」とした。</p>	3
井上	<p>シカの生息密度が高くなり、森林の水源かん養機能が低下、土壌流出など、水源環境保全を図る上で、シカの捕獲と森林整備を一体的に実施する事業のモニタリングでした。未知な要素が多いなか、24年度の成果は上がって評価できると思いました。新たにワイルドライフレンジャーによる捕獲の成果も評価できます。 モニタリングデータの解析と事業効果の検証を継続することが肝要と思います。現場での実演と説明、プロジェクターで事業成果のデータの説明、ワイルドライフレンジャーの仕事に対する姿勢、また、1箇所での現地モニターでしたのでじっくりモニタリングができました。</p>	4

委員	内容	評価点
久保	<p>シカの管理にはこれまでいろいろな回り道をしてきたとは思いますが、森林整備とシカの生息環境整備を1体として考え、まずは高標高地のシカをWLRの活動で、中標高地は組猟で捕獲管理して全体として適正な頭数を持って行こうとする考えは当を得たものと思っている。シカの問題は知床、日光、大台・大峰、剣山・三峰・・・全国にわたっており、本県は考え方も手法も他県に先んじているものと認識しており、今後はより効果が短時間で上がるように期待したい。</p> <p>しかし何事もタイミングがあり、一時期多くの税金を投じこの問題をある段階まで解決することが大切だと考えている。その点から適正な数のWLRの配置や山頂までの人や機材の運搬用のモノレールの設置など税金を使って出来ることは積極的に推し進める必要があると思っている。同時に恒久的にシカの適正数を保存することも重要であり、一時的な激減に追い込むことのないように常に注意することも必要だと思っている。</p> <p>この解決が、本県の水がより良い水質となり、自然豊かな県となることに繋がるものと思っている。</p>	<p>4 (今後に期待して)</p>
倉橋	<p>今回のワイルドライフレンジャーのモニタリングは簡単に判断することが難しい。高度な技術と能力を必要とし、緊張感の連続で、現代版マタギ(今もいらっしゃるのかどうか分かりませんが)を連想しました。</p> <p>ただし、シカ対策として狩猟師の減少を考慮すると、今後も必要な職業だと思います。職業として成立するための方法をこれから検討すべきと考えますが、安易に税金で賄うという方法は取りたくない。もう少し検討する時間が必要と考えます。</p>	<p>3</p>
坂井	<p>【私達は税金だからと言って、いつまでもこんな仕事をさせていいとは思わない。】 猟師は生きるために撃つが、保護管理は人間社会の事情による撃ちっぱなしで、それは撃つ人に殺生をさせることである。撃つ人は手で手を合わせてくださっているのだろうが、税金で払うからといっても、これはひどい仕事である。</p> <p>【現状をどう県民に示し、どう道を開くのか。】 人目につかないように埋めることは、問題を県民の眼にふれないようにすることでもある。県民にはやはり、食べてもらう、着てもらうが最も有効で、学校給食に出せば子ども達に山の問題を五感で感じてもらうことができる。また鹿肉と取組む意思を表明している牧場や肉店と鹿の活用を進めることも大切だ。</p> <p>【現場の士気は高いが、持続性に課題。】 お三方とも、日々死生に向き合っているだけに、よい資質を備えた有用な人材である。しかしそれが1年毎に見直しが入るような雇用形態で、今後日本全体が直面する問題の先駆けとなるのが本当に可能だろうか。</p> <p>【これから日本中が直面する中山間地域問題について、神奈川県は途上県である。】 中山間地域の再生に欠かせないものは「馬鹿者・よそ者・若者」と言われている。鹿や森林の課題を解決するのはやはり、担い手を第一と考える思想だろう。</p> <p>【丹沢ほど多くの人が訪れる山はない。その底力をどう生かすかは問われている。】 小田急電鉄は、多くの丹沢大山の中吊りやポスター、箱根の水など、神奈川の山の魅力を盛んに宣伝してくれているが、当の神奈川県民はそこまでの努力をしているだろうか。丹沢は、小田急・京王沿線の都民の心も魅了している。</p> <p>【生態系における、健全な食物連鎖の復活】 水源環境や生態系を言うならば、この問題の出発点は、鹿を増やした当の人間が鹿を食べなくなつて鹿を増えるにまかせたことである。人は、子どもの時に食べなかった食べ物は大人になっても食べないから、まず鹿肉が学校給食に採用される道を拓かなければならない。ひとつの食文化は、定着するのに20年以上かかる。そこに漁業と同様、あるものをいただくという思想があれば、人間が鹿を食うという食物連鎖は維持された。</p> <p>【900万県民を使い切れるかどうかは、私達に問われている。】 また森林の問題は、つくる(生産者)→つなぐ(企業と行政)→使う(県民)の循環が壊れたところから始まっている。過去の1つの失敗で「とにかく林業はだめだ」と決めつけ、そのための努力もしないで「鹿はどうせ金にならない」と考えるのは誤っている。過疎に悩む県では財源がなく、担い手を確保する他、道がない。その点「担い手問題を金で解決できる神奈川県」「人口が多く消費地が近い神奈川県」にはまだまだやれることがあるはずで、水源環境施策は、まだその中の行政が果たすべき「つなぐ」役割の何にも手を付けていない。今後の展開に期待。</p>	<p>3</p>

平成25年度第1回事業モニター評価一覧

参考資料

高橋	・鹿の頭数調整等の意義が明確に理解できる。	5
	・頭数調整の最前線で働く人材を派遣に頼る基盤の弱さに不安を強く感じた。先進的な取り組みであるとはいえ、迅速に改善策が求められる事案であると感じる。	3
	・猟友会の高齢化問題から専門技術者に依頼することが今後より困難になることから、若手人材育成を迅速に着手していかなければ技術の伝承も滞ってしまう恐れや業務に支障が生じる危険性があると感じる。	3
	・モノレールを延長するなど環境整備を行い、最前線で働く者の負担軽減策なども求められていると考える。	3

増田	地形が急峻な山稜部が空白域だったことからニホンジカ管理捕獲業務等をワイルドライフレンジャーが行うことは、山全体のニホンジカ対策を網羅できるということでは評価できる。しかし、広範囲な現場での管理捕獲業務の他、指導監督、モニタリング等の役割が多く、3人のレンジャーでは効率・効果がどの程度期待できるのか、改善する余地が多くあると感じた。	3
----	--	---

4 実施実務のチェック（資料は理解できたか・現地の状況は理解できたか・説明は理解できたか）

委員	内容
足立	<ul style="list-style-type: none"> ・資料は理解できたか (適) ・現地の状況は理解できたか (適) ・説明は理解できたか (適)
井伊	<ul style="list-style-type: none"> ・資料は理解できたか (適) ・現地の状況は理解できたか (適) ・説明は理解できたか (適)
五十嵐	<ul style="list-style-type: none"> ・資料は理解できたか (適) ・現地の状況は理解できたか (適) ・説明は理解できたか (適)
井上	<ul style="list-style-type: none"> ・資料は理解できたか (適) ・現地の状況は理解できたか (適) ・説明は理解できたか (適)
久保	<ul style="list-style-type: none"> ・資料は理解できたか (適) ・現地の状況は理解できたか (適) ・説明は理解できたか (適)
倉橋	<ul style="list-style-type: none"> ・資料は理解できたか (-) ・現地の状況は理解できたか (-) ・説明は理解できたか (-)
坂井	<ul style="list-style-type: none"> ・資料は理解できたか (適) 現場では用具と装備の使い方、講演では過去の経緯と現状、将来の課題まで網羅した資料と現場映像は、過不足なし。鹿のパフレット/H25.3は、主張(解決策と県民にして欲しいこと)が抜けているが、内容はわかりやすくよい。 ・現地の状況は理解できたか (適) ヒルのいる坂を登り、山の上の鹿の置物を探すことで、空間として理解できた。 ・説明は理解できたか (適) 現場の具体的なお話は、どれもその熱意と共に、記憶に残った。
高橋	<ul style="list-style-type: none"> ・資料は理解できたか (適) ・現地の状況は理解できたか (適) ・説明は理解できたか (適)
増田	<ul style="list-style-type: none"> ・資料は理解できたか (適) ・現地の状況は理解できたか (適) ・説明は理解できたか (適)